

火山によって地形の美しさや、温泉が湧くなどたくさんの恩恵を受けています。しかし、ひとたび噴火すると、私たちの生活に被害を及ぼすことがあります。どのような被害があるのでしょうか。



火山災害の特徴

災害を引き起こす火山現象の特徴について調べてみましょう。



(写真提供:WIKIMEDIA COMMONS) 御嶽山の噴火

火山は、ときとして大きな災害を引き起こします。災害の要因となる主な火山現象には、大きな噴石、火砕流、融雪型火山泥流、溶岩流、小さな噴石・火山灰、土石流、火山ガスなどがあります。特に、大きな噴石、火砕流、融雪型火山泥流は、噴火に伴って発生し、避難までの時間的猶予がほとんどなく、生命に対する危険性が高いため、防災対策上、重要度の高い火山現象として位置付けられています。そのため、噴火警報や避難計画を活用した事前の避難が必要になります。

2014(平成26)年の御嶽山の噴火では山頂付近で死者58人、行方不明者5人(2015年9月現在)という大きな被害がありました。犠牲者の多くは、噴石の直撃によるものでした。

火山灰が多く出る噴火では、広い範囲に影響があります。通常上空1万mくらいまで噴煙が上がりますが、規模の大きい噴火では5万mにまで届く場合があり、風下に大量の火山灰を降らせます。火山灰が降り続けると、日中でも夜のように暗く、積もった灰が道路や鉄道の通行に支障をきたします。また、農業や酪農などにも大きな損害を与えます。



(NNN,読売新聞社,関西大学社会安全学部制作「防災教材「勇氣をもって災害を知り、いのちを守る」を参考に作成)



(写真提供:鹿児島市) 火山灰の影響(鹿児島市)



噴火に関する情報収集と安全確保の方法

気象庁は、噴火に伴う生命に危険を及ぼす火山現象(大きな噴石、火砕流、融雪型火山泥流等)の発生や拡大が予想される場合、「警戒が必要な範囲」を明示し、噴火警報を発表します。

噴火警戒レベルは、火山活動の状況に応じた「警戒が必要な範囲」を踏まえて、防災機関や住民等のとるべき行動を5段階に区分した指標で、噴火警報・噴火予報として知らせます。地元の火山防災協議会等での共同研究を経て、噴火警戒レベルに応じた「とるべき防災対応」が市町村・都道府県の「地域防災計画」に定められた火山で運用されます。

実際に噴火した場合には、噴火が発生したことを知らせる噴火速報、火山灰や小さな噴石の落下範囲を予想した降灰予報などを発表します。いざというときの避難場所と避難経路を確認しておきましょう。

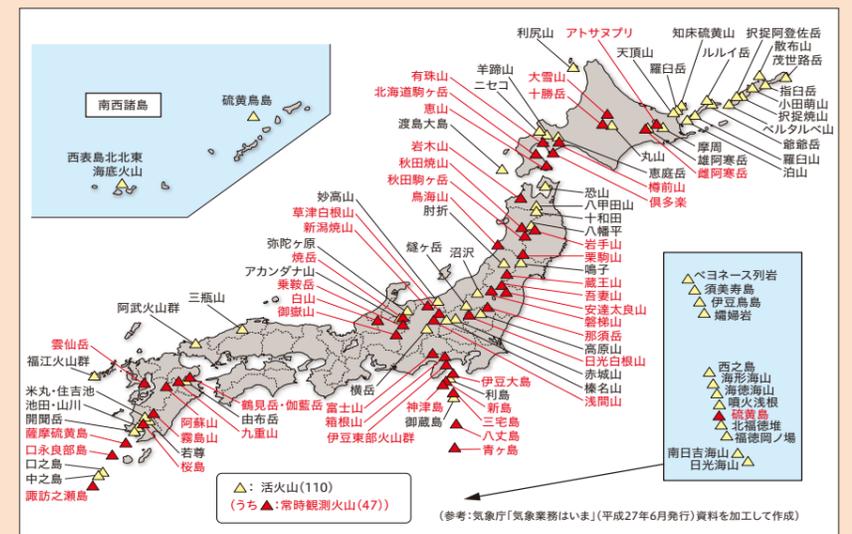
種別	名称	対象範囲	レベルとキーワード	
予報	噴火予報	火口内など	レベル1	活火山であることに留意
	警戒	噴火警報(火口周辺)	火口周辺	レベル2
または火口周辺警報		火口から居住地域近くまで	レベル3	入山規制
特別警戒	噴火警報(居住地域)	居住地域及びそれより火口側	レベル4	避難準備
	または噴火警報		レベル5	避難

噴火警戒レベルごとの対象範囲ととるべき防災対応表(出典:気象庁HP)
※2015(平成27)年12月現在では、宮城県の活火山において、噴火警戒レベルは運用されていません。そのため噴火警報等の発表基準により防災対策を講じています。

日本にある活火山

日本には110もの活火山(おおむね過去1万年以内に噴火した火山及び現在活発な噴気活動のある火山)があります。活動寿命の長い火山にとっては、数百年間、活動していても、1万年単位の長い目で見て、警戒する必要があります。

この活火山のうち、47が常に観測が必要な常時観測火山として選定(2009[平成21]年6月現在)されています。



(参考:気象庁「気象業務はいま」(平成27年6月発行)資料を加工して作成)



宮城県の活火山の歴史やハザードマップから噴火した場合の影響を調べ、避難方法を考えてみましょう。